

神経筋難病患者の気管カニューレ挿入中の 固定紐による頸部の皮膚トラブルへの取り組み —ガーゼハンカチによる皮膚保護への効果—

武市愛子^{#1} 豊田妙子^{#1} 村本やよい^{#1} 田窪香織^{#1}

#1 独立行政法人 国立病院機構 徳島病院 看護部 776-8585 徳島県吉野川市鴨島町敷地 1354番地

受付 2021.12.8 受理 2021.12.15 出版受託 2022.3.10

要旨

気管カニューレの固定紐により、頸部に皮膚トラブルを繰り返すことがある。真田紐と頸部の間にガーゼハンカチを使用し、皮膚保護への効果を明らかにするために本研究に取り組んだ。気管カニューレを真田紐で固定している患者8名を対象に、独自の皮膚観察表にてガーゼハンカチの介入前後で皮膚状態を観察し平均値を比較した。結果、発赤など皮膚が改善した、変化がなかった群が5名、悪化した群が3名であった。頸部の皮膚トラブル改善には、個人の特性が影響することが明らかとなった。

キーワード：神経筋難病患者、頸部皮膚トラブル、ガーゼハンカチ

はじめに

A病棟は神経筋難病病棟であり、気管切開をしている患者が47名中23名(約48%)と多い。気管カニューレの固定には、真田紐(綿100%)を使用している。その18名中、7名(約35%)が、頸部に発赤やただれなどの皮膚トラブルを繰り返すことがある。現在は、皮膚トラブルを起こすと、固定紐の変更やRPクロスガーゼを頸部にはさみ、摩擦をさける対策をとっている。このような皮膚トラブルの原因は、神経難病の特徴的な不随運動、筋固縮、頸部の後屈による皮膚の密着や気管孔からの分泌物・口腔からの流延による皮膚の浸軟、紐による摩擦が考えられる。野島らは「加齢により新陳代謝の周期が延長し、皮膚の再生機能が低下するため傷の回復に時間がかかる。」¹⁾と述べている。皮膚トラブルを起こすと、患者に長期間の身体的苦痛を与えてしまう。入院生活が苦痛なく安心して送れるようにするためには、予防的ケアの実践が重要であり、先行研究で頸椎装具にガーゼハンカチが皮膚保護に有用であったことが報告されているが、気管カニューレ固定紐による頸部の皮膚トラブルに対して、ガーゼハンカチの皮膚保護への効果は報告されてい

ない。そこで綿100%のガーゼハンカチ(以下ガーゼハンカチとする)を使用し、頸部の皮膚トラブル改善と、皮膚保護への効果を明らかにするために、本研究に取り組んだ。

対象と方法

対象者は、A病棟で気管カニューレを真田紐で固定している患者8名(表1)。方法は、1)ガーゼハンカチの交換方法:手技が統一できるようにガーゼハンカチ交換方法の手順を明示し、スタッフへ周知した。1人3枚準備し、四つ折りにし縫っておいたもの(28~30cm)を使用する。(1)固定紐にそって挿入し、週1回の入浴日と汚染がある時に交換、(2)交換時は、頸部を湿ったタオルで、軽く押し拭き、(3)固定紐に指2本が入る程度で結ぶ。2)皮膚観察方法・評価方法:(1)DESIGN-Rとブレイデンスケールを基に評価表を独自に作成した。介入前後6週間、週に1回評価を行う。評価は①【深さ(発赤)】0.皮膚損傷なし 1.持続する発赤 2.真皮までの損傷②【大きさ】0.皮膚損傷なし 3.4未満 6.4以上 16未満 8.16以上 36未満③【炎症・感染】0.局所の炎症兆候なし 1.局所の炎症兆候ありこれらを数値化する。個別に介入前後6週間の

Correspondence to: 武市 愛子. 独立行政法人 国立病院機構 徳島病院 看護部 776-8585 徳島県吉野川市鴨島町敷地 1354番地 Phone: +81-88-324-2161 Fax: +81-88-324-8661 e-mail: takeichi.aiko.jx@mail.hosp.go.jp

平均値を比較した。(2)独自の頸部皮膚観察用紙を作成し、皮膚状態で気になったことを自由記載とした。(3)皮膚が良くなった群と悪化した群の中で、1事例ずつ【深さ(発赤)】【大きさ】【炎症・感染】の平均値を介入前後6週間で比較、評価基準を介入前は基準0とし、介入後を-1 ≤ 0 良い 0=0 不変 0 ≤ 1 悪化とし、良いと不変は効果ありとする。

倫理的配慮

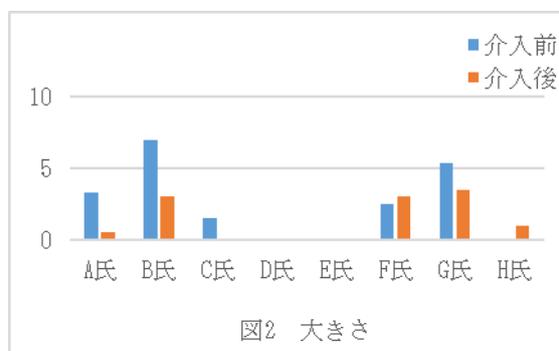
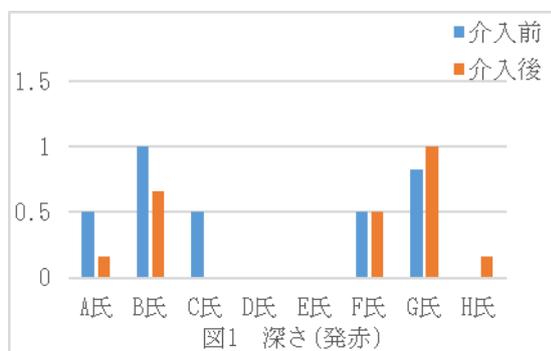
院内の倫理審査委員会にて承認を得た(承認番号 32-4)。対象者及び家族に、研究目的、方法、プライバシーの保護、研究協力は自由意思であり、研究協力の同意後も撤回できることを説明した。また、参加・不参加することへの不利益が生じないこと、研究で得られたデータは本研究以外の目的では使用しないこと、研究終了後5年間保存し破棄すること、皮膚状態の悪化を認めた場合は直ちに研究を中止するなどについて文書及び口頭にて説明を行い、同意を得た。

結果

改善した変化がなかったのはA・B・C・D・E氏、悪化したのはF・G・H氏であった。
 (1)【深さ発赤】B氏は介入前平均値1から介入後平均値0.66であった。G氏は介入前平均値0.83から介入後平均値1であった(図1)。改善したA・B・C氏の介入前平均値は0.66から介入後平均値0.27であった。
 (2)【大きさ】B氏は介入前平均値7から介入後平均値3であった。G氏は介入前平均値5.33から介入後平均値3.5であった(図2)。改善したA・B・C氏の介入前平均値は3.94から介入後平均値1.16であった。
 (3)【炎症・感染】B氏は介入前平均値1から介入後平均値0であった。G氏は介入前平均値0.66から介入後平均値0であった(図3)。改善したA・B・C氏の介入前平均値は0.49から介入後平均値は0であった。

表1 研究対象の特徴

	A氏	B氏	C氏	D氏	E氏	F氏	G氏	H氏
病名	進行性核上性麻痺	多系統萎縮症	ハンチントン病	脊椎小脳変性症	頸椎性脊髄症	進行性核上性麻痺	ハンチントン病	ALS
年齢	72歳	67歳	69歳	50歳	88歳	85歳	65歳	47歳
既往歴	なし	なし	なし	低蛋白血症 貧血	糖尿病 高血圧症	貧血	右耳皮膚感染症	貧血 低Alb血症
BMI	18.4	17.4	14.3	16.7	21.3	25.5	測定不能	15.2
筋固縮	あり	あり	なし	なし	なし	あり	あり	なし
流涎	あり	あり	なし	あり	なし	あり	あり	あり
頸部の角度・可動域	後屈10度	後屈45度 可動域あり	可動域制限 なし	可動域制限 なし	後屈30度	後屈30度	後屈50度 右回旋あり	可動域制限 なし
皮膚密着	なし	あり	なし	なし	あり	あり	あり	なし
過去の皮膚トラブル	褥瘡歴あり	粘膜系のびらんあり	臀部・下肢白癬・頭部びらん性湿疹	気切部肉芽形成あり	褥瘡歴あり	環状紅斑あり	褥瘡歴あり	褥瘡歴あり



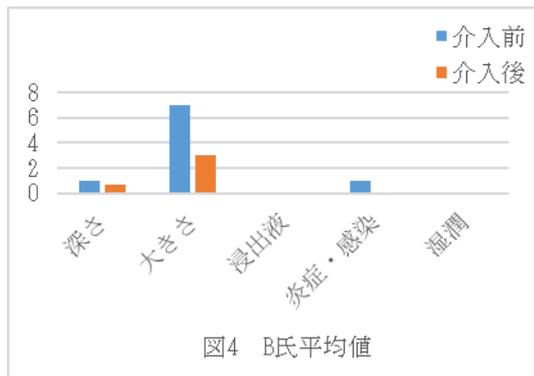
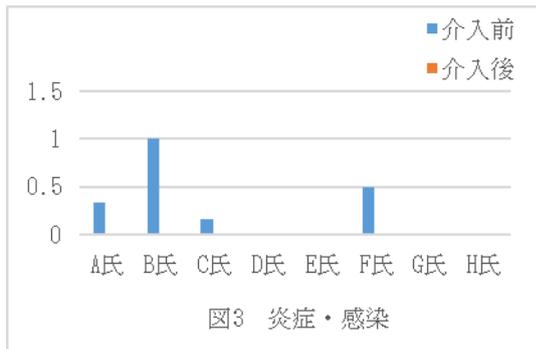
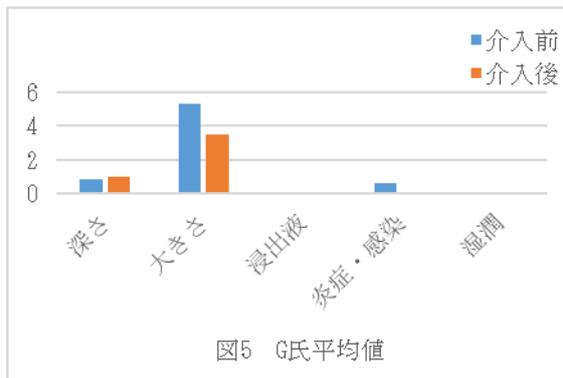


表2 皮膚観察の自由記載(B氏・G氏)

B氏	9月1日	皮膚落屑あり
	9月16日	発赤が縦方向に広がっている
	11月4日	固定紐が皮膚にくい込みあり
	11月13日	固定紐が皮膚にくい込みあり
	11月19日	「ガーゼハンカチの当たり具合はよい」
G氏	9月1日	皮膚の落屑あり
	9月21日	固定紐による圧迫痕あり
	11月13日	皮膚の落屑あり
	11月18日	皮膚の落屑あり



考察

皮膚状態の改善した・変化のなかった A・B・C・D・E 氏と、皮膚状態の悪化した F・G・H 氏について考察する。

1. 改善した・変化のなかった A・B・C・D・E 氏の要因

対象者の特性から、やせ型で頸部の後屈はあるが頸部に可動域がある患者の平均値は、深さ(発赤)が-0.39、大きさが-2.78、炎症・感染が-0.49と改善がみられた。B氏は(図4)(表2)頸部後屈が45度あり介入前は皮膚密着部位と固定紐に沿って発赤があった。また固定紐による皮膚のくい込みや皮膚の落屑がみられた。持続する発赤について野島は「形成部位にこれ以上の圧迫や摩擦刺激を加えないようにするケアが必要となるため、除圧や摩擦低減のケアを行う。」²⁾と述べている。今回B氏に対して、ガーゼハンカチを挿入したことで局所にかかる除圧や摩擦低減のケアができ皮膚トラブルの改善に繋がったと考える。

2. 悪化したF・G・H氏の要因

G氏(図5)(表2)の頸部は、右回旋し後屈の角度50度で拘縮し右頸部の皮膚は密着している。介入前は後頸部に固定紐に沿って発赤があり、右頸部の皮膚密着部位にも発赤があった。また、唾液による流涎があり右頸部は常に湿潤していた。ガーゼハンカチ介入後も、右頸部に持続した発赤があり、+0.17と

悪化を示したが、左頸部の発赤と大きさは-1.83と軽減した。炎症・感染は-0.66と改善を示した。よって、ガーゼハンカチ挿入により部分的に皮膚は改善している。しかし、G氏の皮膚密着は強く、流涎による汚染時はガーゼハンカチの交換を行ったが、右頸部は湿潤環境にあり皮膚の浸軟がみられていた。よって皮膚の発赤に影響していたと考えられる。先行研究で阿久津は、「当て布の交換の頻度は1日に平均1.56回であった。」³⁾と述べている。これらのことから、ガーゼハンカチを1日1回の交換にすることで、皮膚の清潔が保たれ皮膚保護への効果が高まるのではないかと考える。

引用文献

- 1) 野島陽子, 木村陽子:看護技術 4月号認知高齢者と皮膚障害について, 株式会社メヂカルフレンド社, 2020:14
- 2) 野島陽子, 木村陽子:看護技術 4月号認知高齢者と皮膚障害について, 株式会社メヂカルフレンド社, 2020:36
- 3) 阿久津智子他:頸椎装具装着患者の援助, 装具内の当て布素材の検討, 日本看護学会論文集, 看護総合, 2002; 33:148